

第23回
外国人による
日本語スピーチコンテスト

2014年2月1日（土）午後1：00～4：30

ところ／県民文化センター小ホール

主催／公益財団法人茨城県国際交流協会

共催／茨城県

*茨城県議会議長賞

金 瑜眞(韓国出身)

「発音より大切なもの」

皆さんは、外国語を話すとき「発音」にどのぐらい気を付けていますか？皆さんの中には、「発音なんて別に通じればいいんじゃないの？」と思う方もいらっしゃるかも知れません。でも、私はそうは思いません。なぜならば、私は発音オタクだからです。発音にこだわるあまり、ときには「日本人に負けない位、綺麗な発音で話したい！」という気持ちが高ぶり過ぎてしまい、自分が次に何を話そうとしていたかさえ、忘れることもあります。今も若干そんな状態です。そうですね、ここまで来ると、もはや病気に近いです。しかし、残念ながらこの病気は自分が話しているときだけに発症するものではありません。留学生の友達の発音が一度気になりだしたら、その人が何を話していたか、内容はいつの間にか頭の中からどこかへ飛んで行ってしまうのです。

しかし、そんな私に先日思わぬ出来事がありました。それは、私の母が、私に会いに韓国から日本に来てくれたときの事です。私は週に1度、日本人の主婦の方に韓国語を教えています。とても優しい方で、私にとっては日本のお母さん的な存在の方です。いつも私のことを気にかけてくださり、震災の直後は余震がある度「ユジン先生、大丈夫ですか？気を付けて下さいね」と安否の連絡をして下さいました。そこで、私の母が日本に来ることとなり、お互い是非「お会いしたい！」ということで、私の韓国のお母さんと日本のお母さんは一緒に食事をするようになったのです。ところで、その日はなぜか私の授業が予定より遅く終わってしまい、私は待ち合わせの時間に20分も遅れてしまいました。私は待ち合わせの場所に向かいながら、「大丈夫かな…お互いあまり言葉も分からないから、話も通じないだろうし…」と心配していました。ところが私が着いたとき、遠くから見える二人のお母さんはなぜか和気あいあいと話しているように見えました。私はそんな二人が不思議で、遠くから見ていたら、二人は身振り手振りで、ときには電子辞書を開き、英語を交えながら一生懸命コミュニケーションを取ろうとしていました。

そして、私の母が韓国に帰った後、日本のお母さんは、私にこうおっしゃいました。「先生のお母さんは本当に優しい方ですね。娘を思う気持ちがとてもよく伝わりましたよ。」でもその言葉を聞いて、最初、私はよく理解できませんでした。なぜかという私の母は韓国語しか話せないし、日本語や英語だったとしても発音はぎこちなかったはずですが、でもどうして娘を思う気持ちが伝わったのだろう。そのとき、私は発音より大切なものがあることに気づかされました。たとえ、どんなに言語が違っていても、発音がぎこちなくても、話し手の真心が伝われば、コミュニケーションには障害にならないということです。

しかし、残念ながら、今でも私の発音へのこだわりの病気は、まだ完治していません。そして、今、私はこの病気を活かして大学院で日本語学習者のための音声教育に関する研究をしています。しかし、前と一つ変わったことがあります。それは、気持ちを伝える上で大切なことは発音だけではない、ということです。私はこの気持ちを大切にしつつ、私のような、日本人に負けないくらい上手な発音で話したいという学習者への支援を行っていきたくて考えています。皆さん、私の日本語の発音はいかがだったでしょうか。そして、私の気持ちは皆さんに伝わったでしょうか。ご清聴ありがとうございました。